

各水試発トピックス

道南各地からアオリイカの出現情報が寄せられています

アオリイカ *Sepioteuthis lessoniana* は西太平洋からインド洋に分布し、日本では能登半島以西の日本海と房総半島以西の太平洋に多くみられます。捕まえると多量の墨を吐くことから道内では「スミイカ」とも呼ばれています。本州では高級なイカとして高値で取引されることも多いようです。

鰭はスルメイカのようなひし形ではなく、胴体の両側を広く覆う半円形をしています。このため外観の似たコウイカ類とよく間違えられますが、分類上はヤリイカやケンサキイカに近く、コウイカ類とは別の仲間になります。普段、道内でアオリイカをみかけることはあまりないのですが、2012年は道南各地から「コウイカ」「スミイカ」が獲れているという情報が寄せられており、11月7日に函館沖で行った調査船金星丸でのスルメイカ調査でもアオリイカ6尾が漁獲されました(写真1)。以下、コウイカ類との簡単な見分け方を紹介します。

1. 大型で外套長35cm以上になる

コウイカ類は南の暖かい海に大型種が多く、通常、北海道周辺で出現するのは外套長(がいとうちょう=胴の長さ)18cmまでの小型種です。道内

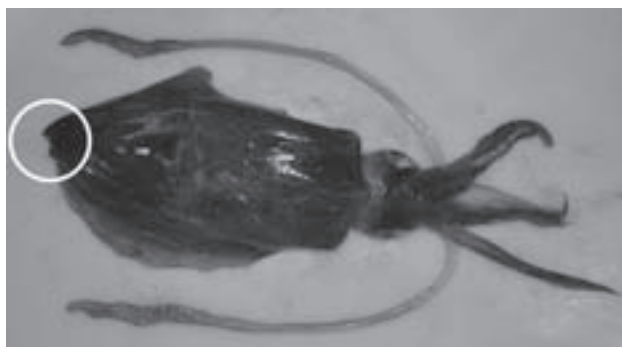


写真1 金星丸調査で漁獲されたアオリイカ

でコウイカに似たイカが獲れた場合、外套長20cmを超える大きさであればアオリイカと考えて良いでしょう。

2. 胴の後端に分泌腺や石灰質の棘がない

ほとんどのコウイカ類は胴の後端(写真1円内)に小さな石灰質の棘を持ちます。これは体内にある貝殻(いわゆる「イカの骨」)の一部が外に突き出したものです。また、コウイカ類のうちシリヤケイカの仲間は同じ場所に褐色の液を出す分泌腺を持っています。アオリイカにはこうした分泌腺や棘がなく、胴の後端は丸くなっています。

3. 貝殻は石灰質ではなく薄いキチン質

胴の背側にある貝殻は、コウイカ類では石灰質でできた舟型をしているのに対し、アオリイカでは薄いキチン質で「軟甲」と呼ばれます。軟甲はスルメイカのような細長い形ではなく、幅の広い木の葉型をしています(写真2)。

2012年の道南海域は8月から9月にかけての表面水温が例年になく高く、スルメイカ漁での夏枯れの長期化など漁業への影響も見られました。本来南方系の種である本種の出現も、こうした海況との関連が考えられます。

(澤村正幸 函館水試調査研究部)



写真2 アオリイカ(上)とスルメイカ(下)の軟甲